

シラヒゲウニ放流技術開発(栽培漁業技術開発事業) (要約)

玉城 信・吉里文夫

本課題はシラヒゲウニの種苗生産と中間育成技術開発を沖縄県栽培漁業センターが担当し、放流技術開発及び関連調査を水産試験場が担当し、水産庁の補助事業として実施した。本調査の詳細は「平成 16 年度栽培漁業技術開発事業報告書、地先型定着種(暖水域)グループ」において報告し、報告書は別途に印刷するので、ここでは水産試験場担当分の概要のみを報告する。

1. 放流技術開発

栽培漁業センターで生産した稚ウニ 171,800 個を今帰仁、宜野座地先に 5～11 月に 6 回に分けて放流した。放流後の生残率は低く、131 日後の 0.2% が最良事例であった。しかし、混獲率は 140 日後に 16%、240 日後に 11% の事例があった(表 1)。台風接近時期前の早期放流の重要性、放流後の殻径 40 mm 以上の個体が岩穴・岩下に多く発見されること、7 月放流個体が 4 ヶ月で漁獲サイズに達すること等が分かった。

2. 関連調査

1) 海藻被度調査

宜野座村漁港地先のガラモ場内に調査範囲の 8 割が海藻被度 50% 以上で、調査範囲の 65% の底質が岩盤である地域が確認された。この地域が、餌料及び隠れ場の豊富さという点でウニ放流に有利な場所であると推察された。

2) 天然ウニの生態解明

宜野座村漁港地先のガラモ場周辺は、ウニ漁解禁前後で生息密度に変化が少なく、これは、1 歳ウニが漁獲された後、当歳ウニが新たに定着しているためではないかと考えられたが、今年度の調査では、事例が不足しているため、次年度、調査事例を増やしたい。今年度の放流地点 2R-1, 3R は天然ウニ密度が高く、放流場所として適していると考えられた。

3) 漁獲実態調査

2004 年の今帰仁漁協の漁獲量は、2,819 kg で前年に比べて増加し、1997 年以降最も増えた。宜野座漁協の漁獲量も 1,237 kg と増加したが、水揚げの内、かなりの量がセリを通さずに直接販売されており、全ての量を把握できていない。実際の漁獲量は、もっと多かったと考えられる。

表 1 平成 16 年度放流ウニ混獲率調査

| | 放流年月日 | 2004 年 7 月 29 日 | 調査年月日 | 2004 年 12 月 7 日～16 日 | 2005 年 2 月 23 日 |
|--------|----------------------|--------------------|-------------|-------------------------|---------------------|
| | | | 放流後経過日数 | 131 日～140 日 | 240 日 |
| 3 R | 放流個体数 | 34,500 個体 | 漁獲個体数 | 77 個体 | 73 個体 |
| | 放流時殻径 (mm) | 22.5 (14.5～42.2) | 漁獲個体殻径 (mm) | 75.8 (60.2～96.4) | 80.0 (67.0～98.3) |
| | 標識個体数 | 8,700 個体 | 標識確認個体数 | 3 個 (69.2, 71.9, 72.1) | 2 個 (69.3, 73.6 mm) |
| | 標識率 | 25.2 % | 漁獲範囲 | 放流中心から半径約 50m | |
| | 標識率から推定した放流個体 | | | 3 ÷ 0.252 = 12 個 | 2 ÷ 0.252 = 8 個 |
| | 混獲率(放流個体/漁獲個体 × 100) | | | 15.6 % | 11.0 % |
| | | | | | |